札幌大学教養部紀要　第43号：149—158頁（1993年10月）

〈研究ノート〉

現象学ノート

堀　川　　哲

1）

フッサール現象学の原点はその直観概念のうちに収斂される。ここに現象学のアルファがありオメガがある。そして，現象学的な思考はその終極において，あきらかに，〈厳密な学〉としての哲学の試みを解体させる。そうした試みが原理的に不可能であるという認識に我々を導いていく。学としての現象学が不可能であるという認識，これが逆説的に，現象学の最大の功績となる。

2）

直観について，『イデーン』第1巻第24節には，こう書かれている。

① 原的に対象を与える働きをする直観こそは，認識の正当性の源泉である。

② 我々に対し〈直観〉のうちで原的に，（いわばその生身のありありとした現実性において），呈示されてくるすべてのものは，それが自分を与えてくる通りのままに，しかし，それがその際自分を与えてくる限界内においてのみ，端的に受けとられなければならない。

3）

世界それ自体の実在性は疑いえない。意識の観念論がいかに言葉を重ねようとも，我々は世界の実在を懐疑する言葉は単に言葉のレベルでしか成立しないという実感をつねにもっている。世界は実在する。サルトル流に言えば，我々のもつ嘔吐感がその証拠である。嘔吐感と共に，あるいは充実の感情と共に，我々は世界の実在を経験する。この経験それ自体は疑う

ことが不可能なものである。

そして，たしかに，そのとき世界の現象を受けとる〈我々〉とは，メルロ＝ポンティの言うように，〈身体〉であるというほかはないものだ。心身の錯綜体としての身体は，つねに，言葉のレベルにおける独我論を撥ねつけるものである。その有無を言わさぬ力は，まさしく，圧倒的であり，これに抵抗できる力は存在しない。

4）

フッサールの直観概念は，世界をその〈生き生きとした・生身のありありとした現実性〉において受け止めようという欲望を表現する。そのとき我々は世界を理解できる。私を理解できる。他者を理解できる。世界は了解されたものとなり，我々はそこで生の・生きられた時間を持つ。そういう欲望である。しかしまた，フッサールにおいて，この世界了解はカッチリとした輪郭をもつ必要があったのである。〈現象学的還元〉への彼の執着と〈超越論的意識〉〈純粋意識〉へのこだわりは，こうした強迫的な心理からしか理解できないものである。我々はそれを精神の病の一種として解釈できよう。

5）

直観とは感覚である。しかし，感覚は感覚それ自体として自足的に在るものではない。感覚は同時に・常に〈概念〉と〈理性〉の眼をともなっている。我々がある音を聴くとき，音の連鎖を聴くとき，我々の耳は同時に解釈の耳をもっている。それが〈聴く〉ということである。おなじことは，〈見る〉〈味わう〉〈嗅ぐ〉といったことにも言える。

したがって，我々の直観において〈生身のありありとした現実性において〉現れてくるもの，という場合も，そのものはすでに我々の意識において見られた〈生身のありありとした現実性〉である。この意味での観念論は必然であり，突破不能である。

〈生き生きとした〉有り様で在るのは，実在としてのリンゴそれ自体では

ない。リンゴはただ存在する。事実として存在するだけである。言い換えれば，世界は存在するという事実が，世界それ自体について言いうるすべてである。

6）

リンゴを見る我々の眼がリンゴを〈生き生きとした〉有り様で見る。〈生き生きとした〉ものとする。そのとき我々に見られたリンゴは，我々の見るという意識の相関者としてのリンゴである。意識作用の相関者としての対象は，実在の対象とおなじものではない。これが，〈ノエシス・ノエマ〉論において語られようとしている事柄である。

7）

フッサールには〈知の絶対的な確実性〉への欲望といったものがあった。この強迫神経症的な欲望から，〈ノエシス・ノエマ〉の循環に耐えられない心性が生み出され，この意識の循環を統合する基底的なものを求めるようになる。そのとき彼の純粋意識論はデカルト的なコギトにきわめて接近するものとなる。意味付与の主体となる何かしっかりとしたものが欲しくなるのである。それが純粋意識とか超越論的意識とか呼ばれるものだが，メルロ＝ポンティのように，この意味を付与し・意味を受けとる〈何か〉を〈身体〉とみれば，もはや我々は〈確実性〉への欲望から解放されることになる。身体は〈両義性〉を本質とするからである。もちろん，こうなれば，そのとき同時に我々は・あるいは現象学は言葉を失うことになるわけだが。

8）

〈すべての実在的統一は《意味の統一》である。意味の統一というものは，意味付与的な意識を前提とし，この意識の方は絶対的であり，それ自身が再び意味付与によって存在するものではない。〉（『イデーン』第1巻55節）

9)

意味付与をおこなう意識が〈それ自身が再び意味付与によって存在するものではない〉と言いうるのは，何か絶対的なもの・全てが始まる始点を想定する場合のみである。確実ナモノガ欲シイ……ここから神学の誘惑が始まる。しかし，我々には，根拠がないということ，理由がないということに耐える訓練が必要である。スベテハ媒介サレタモノデアル。ヘーゲルにしろマルクスにしろ，確実な根拠を求めたとき，おかしなものとなっていくのである。

10)

現象学においては，生き生きとした対象性を受けとり・生み出す直観が，一種の特権的な位相におかれる。この直観理論は〈ノエシス・ノエマ〉論の枠のなかできたえられる。しかし，〈ノエシス・ノエマ〉論は古典的な認識論の枠組みで思考されるものではない。〈ノエシス・ノエマ〉はいわば科学のタームで思考されることはない。〈原的に対象を与える直観〉というものが，つねに〈ノエシス・ノエマ〉論の背景にあり，その思考を規制しているからである。〈ノエシス〉は科学者の視線ではないし，〈ノエマ〉もまた科学的に捉えられた分析可能な対象ではない。

ここから，ハイデッガーやメルロ＝ポンティにおけるように，〈物の見方〉を前述定的なレベルで捉えようという試みが生まれてくる。それは言語以前の原的直観のレベルにおいて見られる世界である。それが〈生き生きとした〉とか〈生身の〉といった形容詞で表現されるような世界である。

11)

〈事物そのものへとたち帰るとは，認識がいつもそれについて語っているあの認識以前の世界へとたち帰ることであって，一切の科学的規定は，この世界にたいしては抽象的・記号的・従属的でしかなく，それはあたかも，森とか草原とか川とかが風景とはどういうものであるかを我々にはじめて教えてくれた経験にたいして，地理学がそうであるのとおなじである。〉(メ

ルロ＝ポンティ『知覚の現象学』序文)

12)

〈ノエシス・ノエマ〉論は意識の構造論であり，その意味では認識論であるが，これが原的直観論を基礎にもつことによって，〈ノエシス・ノエマ〉論はそのまま存在論へと転回される。〈我々に対し《直観》のうちで原的に，(いわばその生身のありありとした現実性において)，呈示されてくるすべてのものは，それが自分を与えてくる通りのままに，しかし，それがその際自分を与えてくる限界内においてのみ，端的に受けとられなければならない〉ということは，要するに，我々は世界と〈気分〉において関係しているのであるし，そしてまた世界はこの〈気分〉において理解されなければならない，ということにひとしいものとなる。

13)

〈ノエシス・ノエマ〉論の存在論への転回はフッサール自身においては，かなりブレをもっている。純粋コギトへの・その確実性へのフッサールの執着がハイデッガー的存在論への転回を阻んでいるのである。それゆえにまた，ハイデッガーやメルロ＝ポンティが超越論的意識へのフッサールの執着を相手にしていないのも必然である。

後期フッサールの〈生活世界論〉が〈ノエシス・ノエマ〉論の認識論的な枠組みを超えていく試みとなる。原的直観の特権性がここでは正面に登場する。生活世界論は西欧合理主義・科学主義批判という文脈で登場する。世界を分析的な科学の視線で一元的に解釈しうるとみるのは，あるいは分析的な科学の視線というのは，地理学の視線でしか山を川を見ることのできない嘆かわしい精神であり，生きられる時間を忘れているというのである。現象学がある種の批判理論としての意味と機能とをもつようになるのはこの場面である。

14)

〈生活世界は根源的な明証性の領域である。一切の学はここに立ち帰ることによって本当の真理性をもちうる。〉（フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』第34節d）

しかしフッサール自身は，この根源的な明証性をもった生活世界について何かを語っているわけではない。そしてまた，じっさい，生活世界について何かを語れるわけでもない。少なくとも，生活世界について何かを語りうるためには，表現的なセンスが必要となる。そしてフッサールに先天的に欠けていたのはその能力である。この点がハイデッガーやサルトル，そしてメルロ＝ポンティたちと決定的にことなっていた点である。

15)

現象学の方向は，基本的に，二つに方向線に分化する。原的直観は〈ノエシス・ノエマ〉構造論の洗礼をうける。道はここから分かれる。

一方には，〈ノエシス・ノエマ〉構造を支える（とされる）コギトの解析学に向かう方向がある。〈ノエシス・ノエマ〉は超越論的意識論との相関において考察される。これは伝統的な認識論の道に通じ，「厳密な学」への欲望へと通じる。この領域では相変わらず煩瑣な哲学的議論が展開される。〈哲学〉の課題が生産され，問いがある以上は論争もあり，哲学者たちの仕事もある。講壇における現象学のやっているのは，たいていはこの方向である。

他方では，しかし，〈ノエシス・ノエマ〉において捉えられた原的直観の考え方は，直接に生活世界に向かう。ハイデッガーはそこにおいて〈不安〉あるいは〈無〉という気分に出会うことになる。存在の意味が問われる。メルロ＝ポンティは〈身体〉に出会う。サルトルであれば〈嘔吐〉に出会う。いずれの場合も，ここでは，知の確実性とか〈明証性〉といったことには何の関心もない。この方向線において語られる言語は，きわめて文学的な言語であるという共通性を持つ。そしてそうした言語全体に共通しているのは，生活世界はけっして語りつくされることはありえない，という

意識，あるいは現象学的還元は不可能である，という意識である。

16)

〈反省は自分自身にたいして絶対的に透明となることはない。〉(メルロ＝ポンティ，同前書，竹内・小木訳，みすず書房，89 頁)

17)

現象学的還元の成果は，現象学的還元は不可能である，という自覚である，とメルロ＝ポンティが言うとき，それはまた学としての哲学の無効宣言でもある。少なくとも，厳密な学としての現象学の試みを放棄することである。現象学はその極において自己の解体を宣言するのである。そして，現象学が哲学の先端に位置するとすれば，それはすべての哲学にたいする無効の宣言となる。この意識をもっとも深く意識していたのは，フッサールやハイデッガーではなく，むしろメルロ＝ポンティである。

18)

現象学的還元の不可能性は，フッサールの現象学が原的直観を始点にするとき，すでに与えられていたというべきであろう。フッサールのそれ以降の苦闘といわれるものは，現象学的還元の不可能の内部にあって，そこから脱出しようという喜劇の表現であるにすぎない。そして脱出を断念するところにメルロ＝ポンティの両義性の哲学が成立するのである。

19)

〈現象学が一つの学説ないしは一つの体系であるより前に，ひとつの運動であったとしても，それは何も偶然でもなければ詐欺でもない。現象学はバルザックの作品，プルーストの作品，ヴァレリーの作品，あるいはセザンヌの作品とおなじように，不断の辛苦である ── おなじ種類の注意と驚異とをもって，おなじような意識の厳密さをもって，世界や歴史の意味をその生まれ出づる状態において捉えようとするおなじ意志によって。〉(メ

ルロ＝ポンティ，同前書，25 頁）

さて，考えてみよう――バルザックの作品，プルーストの作品，ヴァレリーの作品，あるいはセザンヌの作品は〈何を〉捉えているのか，と。我々は〈何か〉を語りうるであろうか，と。

20)

〈言葉もまた音楽と同様に無言であり，音楽もまた言葉と同様に語るものである。……どんな分析も言語を透明なものとすることはできない。〉（同前書，276 頁）

21)

『知覚の現象学』は言語によって書かれ，メルロ＝ポンティの意識は言語によって表現される。しかし，それは同時に，言語は透明なものとはなりえない，ということを言語によって表現するのである。ここには矛盾はない。循環は矛盾ではない。矛盾はない，しかし，ある種の空虚は残る。

22)

〈言葉のざわめきの下にもう一度始元の沈黙をみいだすこと。〉（同前書，302 頁）〈沈黙せるコギト〉が一切の表現活動を生気づけ，指導している。

23)

世界との生き生きとした経験を（哲学のレベルにおいて）回復しようという現象学の運動は，ついには〈沈黙せるコギト〉に至る。そうなるほかはない。しかし，あきらかに，我々は〈沈黙せるコギト〉を語りうる言葉をもつことはできないのである。

24)

現象学はこの地点において，ウィトゲンシュタインのテーマと出会うことになる。〈語りえないものについては，沈黙しなければならない。〉

25)

しかし〈語りうるもの〉とはなにか？

解のありうるものについては問いが成立し，その問いの対象は語りうるものとなる。解がある，とは，解が複数ではないということである。多くの解が存在するものは本当は解ではない。この場合，一般的には，単一の解が成立するものは，科学の言語のみであるという見方もありえようが，しかし，問題はそう単純ではない。〈実証〉できるもの〈反証〉できるもののみが語りうるわけではない。

26)

ゲームの規則がひとつであれば，ゲームは成立する。そのとき〈答え〉が成立し，したがって〈問い〉は成立する。ある種の〈神〉についての問いは，その神の存在を疑うことのない共同体のなかでは成立する。共同体とは，ゲームの規則を共有している集団であるからである。こう考えていくと，何を語りうるものとし，何を語りえないものとするのか，その分岐点は〈科学的〉であるかどうかという点にあるのではなく，ゲームの規則を共有しうるかどうかに依存することになる。この点では，経済学者たちや哲学者たちの共同体とオカルト信者たちの共同体との間に原理的な差異は存在しない。

27)

しかし，言語ゲームの理論によって〈語りうるもの〉と〈語りえないもの〉との限界線を引こうという作業は基本的に一種の分類整理学といったものであり，現象学の最終的な課題に応えうるものではない。そしてまた，ウィトゲンシュタイン自身の意識の底にとどくものでもない。

28)

問題そのものは明解である。

もし〈沈黙せるコギト〉が我々の一切の表現活動を生気づけているもの

であり，そして我々が原理的にこの〈沈黙せるコギト〉を言語の透明性のなかで捉えることができないとすれば，少なくとも現象学的な志向性をもった意識に残されている本質的なことは，〈表現〉することだけである。言葉であれ，色彩であり，音であれ，身体であれ，ともあれ表現の行為のみが唯一意味のある行為であるということになる。そして表現において肝心なことは，表現という行為のみであって，〈何が〉表現されているのかを語ろうという欲望それ自体を・言い換えれば〈哲学〉という行為それ自体を断念することなのである。そのときたしかに，逆説的に，現象学はセザンヌやプルーストの作品とおなじ次元に立つことになろう。